

2010年度 エコノメトリックスII&上級エコノメトリックスII
 第8回宿題 (2010年12月17日出題)
 解答例

2011年1月11日

Q. 6.8

DGP(Data Generating Process) より

$$\hat{u}_t \equiv y_t - x_t(\hat{\beta}) = x_t(\beta) + u_t - x_t(\hat{\beta})$$

と書ける。次に $x_t(\hat{\beta})$ を真値 β_0 の周りで2次の項まで Taylor 展開すると、

$$x_t(\hat{\beta}) = x_t(\beta_0) + \mathbf{X}_t(\beta_0)(\hat{\beta} - \beta_0) + \frac{1}{2}(\hat{\beta} - \beta_0)' \bar{\mathbf{H}}_t(\hat{\beta} - \beta_0)$$

となるから、これを最初の式に代入すると (6.10) を得る。

(6.10) を \mathbf{b} を使って書き直すと、

$$\hat{u}_t = u_t - n^{-1/2} \mathbf{X}_t(\beta_0) \mathbf{b} - \frac{1}{2} n^{-1} \mathbf{b}' \bar{\mathbf{H}}_t \mathbf{b}$$

となる。これより $\sum_{t=1}^n \hat{u}_t^2 = \hat{\mathbf{u}}' \hat{\mathbf{u}}$ は

$$\begin{aligned} \hat{\mathbf{u}}' \hat{\mathbf{u}} &= \mathbf{u}' \mathbf{u} + n^{-1} \sum_{t=1}^n \mathbf{b}' \mathbf{X}_t(\beta_0)' \mathbf{X}_t(\beta_0) \mathbf{b} + \frac{1}{4n^2} \sum_{t=1}^n (\mathbf{b}' \bar{\mathbf{H}}_t \mathbf{b})^2 \\ &\quad - 2n^{-1/2} \sum_{t=1}^n u_t \mathbf{X}_t(\beta_0) \mathbf{b} - \mathbf{b}' \left(n^{-1} \sum_{t=1}^n u_t \bar{\mathbf{H}}_t \right) \mathbf{b} \\ &\quad + n^{-3/2} \sum_{t=1}^n \mathbf{X}_t(\beta_0) \mathbf{b} \mathbf{b}' \bar{\mathbf{H}}_t \mathbf{b} \end{aligned}$$

と表すことが出来る。求めたいのは、 $n \rightarrow \infty$ のときに右辺がどのようになるかである。まず右辺2項目は

$$\sum_{t=1}^n \mathbf{X}_t(\beta_0)' \mathbf{X}_t(\beta_0) = \mathbf{X}_0' \mathbf{X}_0$$

であり、

$$\mathbf{b} \simeq \left(n^{-1} \mathbf{X}_0' \mathbf{X}_0 \right)^{-1} n^{-1/2} \mathbf{X}_0' \mathbf{u}$$

であることを用いると、

$$\mathbf{u}'\mathbf{X}_0(\mathbf{X}_0'\mathbf{X}_0)^{-1}\mathbf{X}_0'\mathbf{u} = \mathbf{u}'\mathbf{P}_{\mathbf{X}_0}\mathbf{u}$$

となる。次に 3 項目は $O(1/n)$ であるので 0 に収束する。4 項目は

$$\begin{aligned} -2n^{-1/2}\mathbf{u}'\mathbf{X}_0\boldsymbol{\beta} &\simeq -2n^{-1/2}\mathbf{u}'\mathbf{X}_0(n^{-1}\mathbf{X}_0'\mathbf{X}_0)^{-1}n^{-1/2}\mathbf{X}_0'\mathbf{u} \\ &= -2\mathbf{u}'\mathbf{X}_0(\mathbf{X}_0'\mathbf{X}_0)^{-1}\mathbf{X}_0'\mathbf{u} \\ &= -2\mathbf{u}'\mathbf{P}_{\mathbf{X}_0}\mathbf{u} \end{aligned}$$

となる。5 項目は

$$n^{-1}\sum_{t=1}^n u_t \bar{H}_t \rightarrow E(u_t \bar{H}_t) = \mathbf{O}$$

となるため、また 6 項目は $O(1/\sqrt{n})$ であるため、それぞれ 0 に収束する。
これらの結果を代入すると、

$$\hat{\mathbf{u}}'\hat{\mathbf{u}} = \mathbf{u}'\mathbf{u} + \mathbf{u}'\mathbf{P}_{\mathbf{X}_0}\mathbf{u} - 2\mathbf{u}'\mathbf{P}_{\mathbf{X}_0}\mathbf{u} = \mathbf{u}'\mathbf{M}_{\mathbf{X}_0}\mathbf{u}$$

よって、

$$|\hat{\mathbf{u}}'\hat{\mathbf{u}} - \mathbf{u}'\mathbf{M}_{\mathbf{X}_0}\mathbf{u}| \rightarrow 0 \quad \text{as } n \rightarrow \infty$$

が示せる。

Q. 6.9

(6.40) の結果から $\hat{\mathbf{u}} \stackrel{a}{=} \mathbf{M}_{\mathbf{X}_0}\mathbf{u}$ であることがわかる。6.7 節 (p.243) ではこの関係を使って、(6.68) 式及び (6.69) 式の非線形回帰の残差 2 乗和を使って計算された F 統計量の分子を r 倍すると、漸近的に

$$\mathbf{u}'(\mathbf{M}_0 - \mathbf{M}_1)\mathbf{u} = \mathbf{u}'(\mathbf{P}_1 - \mathbf{P}_0)\mathbf{u} \quad (Q6.9 - 1)$$

と等しくなることを示した。もちろん分母は漸的に σ_0^2 と等しくなる。

いま (6.80) 式及び (6.81) 式の二つの GNR の残差 2 乗和 (SSR) を使って計算された F 統計量を考えることにしよう。(6.80) 式の SSR は、 $\mathbf{M}_{\hat{\mathbf{X}}_1} \equiv \mathbf{I} - \hat{\mathbf{X}}_1(\hat{\mathbf{X}}_1'\hat{\mathbf{X}}_1)^{-1}\hat{\mathbf{X}}_1'$ とおくと、

$$(\mathbf{y} - \hat{\mathbf{x}})'\mathbf{M}_{\hat{\mathbf{X}}_1}(\mathbf{y} - \hat{\mathbf{x}})$$

となる。また (6.81) 式の SSR は、 $\mathbf{M}_{\hat{\mathbf{X}}} \equiv \mathbf{I} - \hat{\mathbf{X}}(\hat{\mathbf{X}}'\hat{\mathbf{X}})^{-1}\hat{\mathbf{X}}'$ とおくと、

$$(\mathbf{y} - \hat{\mathbf{x}})'\mathbf{M}_{\hat{\mathbf{X}}}(\mathbf{y} - \hat{\mathbf{x}})$$

となる。よって F 統計量の分子を r 倍すると、この 2 つの SSR の差、つまり

$$(\mathbf{y} - \hat{\mathbf{x}})'\mathbf{M}_{\hat{\mathbf{X}}_1}(\mathbf{y} - \hat{\mathbf{x}}) - (\mathbf{y} - \hat{\mathbf{x}})'\mathbf{M}_{\hat{\mathbf{X}}}(\mathbf{y} - \hat{\mathbf{x}}) \quad (Q6.9 - 2)$$

になる。

$\hat{\beta}$ の一致性は、 $n \rightarrow \infty$ のときに $M_{\hat{X}_1} \rightarrow M_0$ 及び $M_{\hat{X}} \rightarrow M_1$ となることを意味する。(6.40) 式を導くのと同様にして、

$$y - \hat{x} \stackrel{a}{=} M_0 u$$

がいえる。

よって (Q6.9-2) 式は漸近的に

$$u' M_0 u - u' M_0 M_1 M_0 u = u' (M_0 - M_1) u \quad (\text{Q6.9-3})$$

と等しくなる。これには (2.35) 式の結果である $M_0 M_1 = M_1$ を利用している。Q2.15 を参照のこと。

(Q6.9-3) 式の右辺は (Q6.9-1) 式の左辺と等しいので、二つの F 統計量の分子は漸近的に等しくなることがわかる。GNR にもとづく F 統計量の分母はちょうど (6.69) 式の SSR を $n - k$ で割ったものになっている。帰無仮説の下ではこれは明らかに σ_0^2 に収束する。よって二つの F 統計量は漸近的に同じ確率変数に収束する。